

書 評

大嶽幸彦著：『探検家と地理学者－18世紀フランスの啓蒙思想と地誌学－』古今書院，2016年2月刊，155p.，3,200円（税別）

本書では、18世紀フランスの地理学史という、日本では他に例をみないテーマが扱われている。これまでに書かれた地理学史の解説は、どれをとっても近代地理学の祖をフンボルトやリッターとし、19世紀以降の動向に焦点をあてるのが普通であった。これは何も日本だけに見られる現象ではなく、当の欧米でも、入門書の類は同じようなものである。そうした一般的な風潮に日本も追随したというのが、本当のところであろう。その意味で、単行本のタイトルに「18世紀」が登場する本書は、まれであり貴重な価値をもっている。

ただし、概説書ではなくモノグラフ的な研究にまで目を向けると、さすがに本場の欧米では18世紀の地理学、あるいは17世紀の地理学などについて、重厚ですぐれた研究の蓄積がある。たとえば、18世紀のフランスについては、500ページをこすブロック（1975）の大著がある。本書の著者である大嶽氏は、この大著に多大の感銘をうけて「それこそ土曜も日曜もなく」（本書まえがき）全訳に取り組まれ、健康を損ねるほど打ち込まれたそうである。

本書の中核をなすのは、このブロックの大著『啓蒙思想家たちの地理学－18世紀におけるフランスの地理学者と探検家－』を紹介した第2章と第3章であり、ページ数でも全体のちょうど半ばを占める。本書のタイトルを見ても、そのキーワードは（順番こそ違うが）ブロックの書名にあらわれるキーワードと共通している。

また、これら二つの章では、ブロックの書名がそのまま章のタイトルで使われ、「その1」「その2」で区別されている。ちなみに、この区分は原著の構成を反映していて、これら二つの章の下位の小見出しには、原著の章節のタイトルがそのまま採用されている。興味深いので、参考までに列挙すると以下のようなものである。第2章（第1部「地理学における人文主義の終焉（1700-1765）」；1. シリウス星からみた地球；2. 熟知された地平線；3. 偉大な啓示；4. 持続する謎；5. 一般地理学に向けて；6. 18世紀の地理学）、第3章（第2部「世界への新しいまなざし（1765-18世紀末）」；1. 地理学と航海術の進歩；2. 熱帯への知識；3. イスラムへの知識；4. ヨーロッパとその延長部；5. 地球科学と人間科学）。

著者によれば、これらの二つの章で原著の内容を「7分の1以下と、かなり圧縮して」（p.53）紹介したと書かれている。おそらく本文だけで500ページ近くある原著を、本書では約70ページに要約したという意味であろう。しかし、読んでみての印象は、それ以上に圧縮されている感じであり、その割合は10分の1以下、あるいは20分の1程度のように思われる。そのため、これだけの分量では、フランス（ひいては西洋）における18世紀の地理学について、不得要領な（あるいは消化不良の）思いにかられるのではと心配せざるを得ない。やはり、全訳があるならば、それに目を通すにしくはない。このテーマに関心がある向きには、大嶽氏の手になる全訳にあたることを是非ともお勧めしたい。ちなみに、全訳本は私家版として印刷されたが、主要な地理学教室がある大学には寄贈がなされたそうで、筑波大学や東京学芸大学、立正大学など、多数の付属図書館で保管さ

れている。インターネットのCiNii Booksで検索したところ、所蔵図書館として40カ所がリストに出てくるので、身近なところで手に取っていただきたい。

以上では、ページ数で本書の半ばを占める「18世紀」関連の二つの章について言及した。これに対して、残りの半ばを占める「序」(pp.1-27)や第1章「地誌学に関する一考察」、第4章「大学における地誌教育の内容と問題点」は、直接「18世紀」と関連しておらず、いくぶん肌合いが異なる。むしろ、そこでのキーワードは(章のタイトルからも明らかなように)「地誌学」なのである。もちろん、18世紀の地理学(あるいは18世紀に限らず、伝統的な地理学)は、ほぼ地誌学であったため、「18世紀」と「地誌学」がたがいに無関係ということはない。それでも、本書を素直に通読すれば、著者の考察の力点が「地誌学」にあり、本書を性格づける最大のキーワードは「18世紀」ではなく「地誌学」であるという感を抱かざるを得ない。その点で、本誌の編集部は書評者の人選を誤ったと言えないこともない。おそらく、本書のタイトルに幻惑されたのであろう。

こうした次第なので、この紹介文にしても的外れや筋違いという批判があるかもしれない。評者の関心のありかに対応して、つまみ食いな扱いになったことをお許しいただきたい。

(手塚 章)

戸井田克己著：『青潮文化論の地理教育学的研究』
古今書院、2016年3月刊、344p., 6,800円(税別)

評者は福岡市で生まれ育った。九十九里浜で初めて泳いだ際に、海水が何と冷たいのだろうと思った。その後、北緯40度の秋田県の男鹿半島で初めて泳ぐと、海水温は予想よりはるかに暖か

く、夏の海は穏やかであった。福岡では、毎朝、行商人が「おきゅうと」を売りに来た(1960年代の記憶)。エゴノリという海藻を加工して作ったおきゅうとは、福岡の朝食には欠かせないものであった。大学院の巡検で佐渡を訪れた際、形状は異なるが、おきゅうとの味がする「いごねり」という料理が旅館の食卓に出てきた。そして秋田大学に勤務するようになり、佐渡の「いごねり」と同様のものが、秋田にもあり、「えご」と呼ばれていた。その時、遠く離れた福岡、佐渡、秋田に、共通する文化の流れを感じた。1980年代前半のことであった。

さて、本書のテーマである青潮文化論は、市川健夫(東京学芸大学名誉教授)が提唱したものである。月刊誌『地理』古今書院1989年5月号には、特集「青潮文化—もうひとつの日本文化論」が掲載された。市川は黒潮に対して対馬海流を「青潮」と呼び、日本文化の培養に青潮の影響を指摘し、日本海をめぐる新文化論として「青潮文化論」の考え方を提唱した。本書は、長年、地理教育学、地理学、民俗学を学び、研究してきた著者が、青潮がもたらした日本の風土を多面的・多角的に理解し、その意義を地理教育の文脈から検討したものである。

著者によれば、琉球諸島付近で黒潮から枝分かれし、対馬海峡を経て日本海に入り込む青潮は、日本海沿岸を北海道まで北上するその流域の特性において、黒潮以上に日本に大きな影響を与えてきた海流であり、青潮が要因となって導き出される、温暖湿潤で南洋的な文化的特性を「青潮文化」と呼んでいる。また、青潮が狭い対馬海峡を通過することにより、朝鮮半島および中国本土からの文化的要素を伝える推進力ともなっており、青潮文化は、南洋的であり、かつ大陸的な、衣食住をはじめとするさまざまな民俗文化あるいは生活文化のことを指すとしている。